

M先生の年賀状不定期便——人文学会と私

小馬
徹

人文学会が重ねてきた星霜が、六十を数えたという。それが物心ついてからの私の来し方とびつたり符合することに思い当たってみると、いささかの感慨がある。いやいや、学会員としての年月が既に私の半生の三分の一の長さに余る、そのことの方をむしろ果報として、じつくりと噛みしめるべきなのだろう。性狷介にして独立不羈というのが私の通り相場であろうから、今にして、歴代学会員諸兄弟の温情がことさら忍ばれるのである。

神奈川大学へ赴任したのは、人文学会が齢四旬を迎える少し前のことだった。前任校で俄に大学院構想が持ち上がり、その要員にされそうな雲行きが嫌だったので、神大外国語学部が一般教養担当教員を募っているのを偶々知るや、急遽書類を書き送った。そして、どうにか間に合ったのだ。何も知るところがなかった大学に赴任してみると、ちよいとした襞がそここにありそうな、どこか寛いだ学風が嬉しくて、すっかり気に入っ

てしまった。

大体が、配属された一般教育部会からして、奥床しいそんな襪の一つにののように思えた。そう、「ゼミの神大」という、当時の一枚看板の。私たちのゼミには、横浜キャンパス全学科の学生が自由に応募できた。入学していざ実際に学間に接してみると思わぬ展望が大きく開けてきて、学科の枠組みなどは乗り越えて、どうしてもその先へ分け入ってみたいという意欲に突き動かされる学生が、少数ながら必ず出てくる。我々のゼミは、いわばそんな学生たちの受け皿だった。だからこそ、誠に楽しい談論風発のゼミにもなったのだ。私の（文化人類学の）ゼミ生は、なぜかスペイン語学科、経済学科、貿易学科所属の学生が多かったものである。

中でも、赴任早々の頃のゼミ生には、秀逸な者や面白味のある輩が少なくなかった。放課後個人的に人類学と英語を教えたスペイン語学科のM君は、東京大学大学院に進み、今は米国の大学で教鞭を執っている。同年の貿易学科生Kさんは、豊かな文才を生かして大手の雑誌編集者になった。何しろ、高校時代は受験勉強そっちのけで、シェークスピアを片端から残らず読んだのだそうだ。文章の瑞々しさとしなやかな個性を、今でも懐かしく思い出す。

そのM君も、Kさんも、人文学会にはお世話になっている。六角橋の横浜銀行支店横から川美煎餅本舗脇を通って延びる通学路が神大通用門方面から下ってくる通学路と交差する辺りに、土志田という安い小さな八百屋があつて、売れ残りのバナナを一籠百円で店頭に並べていた。M君はバイトをせず、その一籠のバナナを二三日分の昼食に充てて勉学に専心した。そして、人文学会学生部会の「懸賞論文大会」の季節が巡ってくると、今年は論文部門の特賞、翌年はエッセー部門の特賞と賞金を確実に稼いで、そっくり学資の足しにした。Kさ

んは、2年生の時に論文部門で見事入賞する。審査員の鳥越輝昭先生が才能に目を留めて、「今まさに磨かれようとしている宝石の原石」と高く評して下さった。その言葉が、どんなに大きな励ましとなって、Kさんの尻を力強く後押してくれたことだろうか。

『人文研究』もまた、私には掛け替えない襖の一つであり続けてくれた。守備範囲が広い人類学の研究者の中でも、私は恐らく飛び抜けて気が多いと思う。学内の雑誌や紀要では、常民研の『歴史と民俗』（平凡社）に歴史学・民俗学に人類学が接する辺りのこと、『神奈川大学評論』にはアフリカのことを中心に、そして『人文研究』と『人文学研究所報』には、しかとは彼此の分野を特定でき兼ねる自由なテーマで、気髄に書かせて頂いた。心の片隅では、人文学会に迷惑を掛けていなければいいかと、多少は気遣いながら。

鳥越先生といえば、二〇〇二年秋、『人文研究』M教授退職記念号（第四百十六号）に草された献辞、「主不在の研究室」の、腹藏のない反語法が忘れ難い。「四角いがつしりした肩の上に、四角い顔が乗り、そこに四角い眼鏡が掛けられていて、そのなかで大きな目が光っている」。同号の口絵を飾る一頁大の肖像写真のM教授の風貌をこれ以上見事に言い表すことは難しい。そして、こう続く。「研究室は、十数年前に入室したときに運びこまれた大量の本や書類が、整理も処分もされぬまま、積み重なった場所だった」。仕事は専ら共同研究室でなさった。「先生は、知性も、言語も、体も軽快である。軽快な知性は、素早く広範に、新しい知識と情報を吸収する。浅草生まれの東京弁は、早口に、話題から話題に飛び移っていく。」「軽快にいつも動いているためには、吸収し終えた本や書類に構っている暇はない、ということなのだろう。」「研究室と、住まいのマンションは、それゆえのゴミ捨て場だった」。

ふーむ。M先生とは、時々廊下等で擦れ違って軽く会釈する程度のお付き合いしかなかったが、鳥越先生のこの短い一文で、私に劣らぬ独立独歩、不羈の方だったことを学んだ。

そのM先生から、御退職後も、年を跳び跳びにしてポツポツ年賀状を頂くことがあった。型通りに印刷された晴れやかな意匠の裾に、概ね何時も次のような短文が細かな字で認められていた。「本当は、先生の論文が一番好きなのです。楽しみにしています」。私が『人文研究』のどれかの号に何かの文章を書いた翌年の正月に、決まって賀状を下さるのである。後にも先にも、そして誰からも、これ程心嬉しい年賀状を貰ったことはなかった。